

## 日本統治期台湾文学研究

日本人作家の抬頭 西川満と「台湾詩人協会」の成立

中 島 利 郎

### 提 要

一九三七年、台湾文学進入了一個新的段階。「台湾詩人協会」の成立及其機関誌『華麗島』の創刊、使得在此以前以台湾人作家為中心的台湾文学界轉向了以日本人作家為中心的段階。本稿就是对這一轉變過程的詳細考察。

### Key words

台湾文学，西川満，『華麗島』

#### 一．西川満の「台湾文芸界への展望」

昭和一二年（一九三七）四月一日、台湾の日本人経営の大手新聞『台湾日日新報』『台湾新聞』『台南新報』各紙が新聞の漢文欄（中国語欄）を自主廃止した。六月一日には台湾人経営の『台湾新民報』も同様の処置をとった<sup>(1)</sup>。それは、台湾人漢文（中国語）作家の発表の場を大幅に縮小した。次いで、同年六月一五日、当時台湾で唯一の文芸雑誌、楊逵主宰の『台湾新文学』が第二巻第五号（通巻一五号）を最後に、突然発行を停止した<sup>(2)</sup>。同年七月七日には盧溝橋事件が勃発して日中戦争が始まると、日本政府は八月二四日に「国民精神総動員実施要綱」を決定し「国民精神総動員委員会」を設置して、人々の生活を監視するようになり、また昭和一三年四月の「国家総動員法」公布に基づく「国民徴用令」に従い軍需工場等に国民を強制徴用した。文学界においても石川達三の「生きてゐる兵隊」を掲載した雑誌『改造』（昭和一三年三月号）が発売禁止となり、作家たちは従軍作家として大陸に渡り、戦争の影は日に日に濃くなった。台湾でも台湾総督府によって、台湾人を日本人化しようとする「皇民化運動」が次第に強化され、日本語の使用が強制されるだけでなく、昭和一二年には、「非国民の言動」の禁止、台湾人の悲願であった台湾自治を目指す台湾地方自治聯盟の解散、「国民精神総動員」本部の台北設置及び各州庁への支部の設置が実施された。昭和一三年から一四年かけては、台湾志願兵制度の実施の発表、台湾の寺廟整理と神社参拝の強要、台湾の南進基地化等、戦時体制強化が押し進められた。『台湾新文学』停刊以降のこのような状況は当然台湾の文学界にも影響し、台湾の文学界には、『風月報』という漢文版の消閑娯楽雑誌という例外及び俳句や短歌といった日本の伝統文芸詩誌を除けば、文芸専門誌はなくなり、台湾文学は沈滞期に入った<sup>(3)</sup>。そして、それは昭和一四年末まで続いた。

昭和一四年一月一日、台湾日日新報社の学芸部長であった西川満は、『台湾時報』一月号に「台湾文芸界の展望」という一文を発表した。この文章の前半には台湾在住の日本人文芸家と台湾人文芸家及びその作品が紹介されている。言及された主な人物は矢野峰人、島田謹二、黄得時、楊雲萍、新垣宏一、小山捨月、北原政吉、本田茂光、水蔭萍、後藤大治、上清哉、藤原泉三郎、藤野雄二、郭水潭、石田道雄、樋詰正治、平井二郎、濱口正雄、田淵武吉、山本孕江、龍瑛宗、楊

達、呂赫若、張文環、池田敏雄、濱田隼雄、中山侑、鶴丸資光等、小説家は勿論詩人や散文家、戯曲家、評論家及び歌人、俳人にまで及んでおり、当時の代表的な台湾の文芸家はほとんど取り上げられ讃美または肯定的に紹介されている。興味深いことは、西川満自身が距離を置いていた作家たちにも言及していることである。たとえば、左翼系作家であった上清哉（上忠司）や藤原泉三郎（林善三郎）を「過去に花々しい動きを見せた」といい、また西川満の「貴族性」を嫌い、西川満を中心とするグループを「文学の暴力集団」<sup>4)</sup>と非難した藤野雄士を「俊鋭」と称し、後に「リアリズムの問題」<sup>5)</sup>の中で間接的に罵倒の対象とした楊達、呂赫若をも肯定的に取り上げていることである。「リアリズムの問題」では、台湾のリアリズム作家を次のように評している。

～文章や形式はどうでもよい、真実を書くことが尊いのだ。一にも真実、二にも真実。虎と見て石に矢のたつためしあり、真実さへ書いて居れば必ず人の肺腑をうつ、真実を書くこと、これぞ文学の本道である などと云ふ迷信を、今もつて信奉してゐる人が相当多い。しかも滑稽なことに、これがリアリズムだと思つてゐる。～ノ～大衆がどう感ずるもよし、文学や美術はあくまで「芸」 Art である。大衆に誤解されるを恐れて、芸術をまげる勿れ。まげるなら、むしろ真実だ。芸術の世界は、先づ真実を超えることから始まる。

また、昭和一八年五月一日『文芸台湾』第六巻第一号掲載の「文芸時評」では、次のように述べている。

一体これまでの台湾の文学の主流をなして来た糞リアリズムは、全く明治以後に日本に入つて来た欧米的な文学手法であつて、桜の花を愛する少くとも我々日本人としては全く共鳴することの出来ないものである。安価な人道主義の片鱗でもあればまだしも、俗悪な深刻さ、無批判な生活描写、どこに日本の伝統が生きてゐよう。ノこのことは特に本島人作家に云へると思ふのである。真のリアリズムは決してそんなものではない。相も変わらず継子いぢめか、家族の葛藤などを後生大事と風俗描写してゐる間に、本島の次代層は勤行報国隊に、志願兵に活発な動きを示してゐる。現実に脊を向けた無自覚なリアリズム作家、何と云ふ皮肉であらう。

この批判に対して楊達は伊東亮の筆名で「糞リアリズムの擁護」(『台湾文学』第三巻第三号)を書いて猛烈に反撥した。これらの文章はかなり後に発表されているが、「台湾文学の主流を」「糞リアリズム」と批判した西川満の信条が「台湾文芸界の展望」を発表した時点と基本的には異なっていたとは考えられないので、リアリズム作家の文学を全面的に肯定するはずはなかった。故にこれらの文芸家たちを列挙したのには、それなりの理由があるはずである。それは「台湾文芸界の展望」の後半部から推測できる。西川満は以上に揚げた作家たちのこれまでの活躍を台湾文学の「開花期」と捉え、更に次のように述べている。

かく觀じ来つて、つくづく思ふのは、開花期にある台湾の文芸は、今後あくまで台湾独自の発達をとげねばならないと云ふことである。断じて中央文芸の垂流や、従属的な作品であつてはならない。～わが南海の華麗島にも当然その名にふさはしい文芸を生み、日本文学史に上特異の地位を占むべきである。ノ日本はやがて台湾を中心として南に伸びてゆくであらう。

われら文芸の道に携はるもの、今にして深く自覚を持たざりしならば、後世、子孫に対して何の面目があらう。華麗島の文芸をして、南海にふさはしき、天そそり立つ巨峯たらしむること、これがわれらの天職である。/~われらの郷土文学も亦、止暇断眠的努力によつて、必ずや光栄ある結実期に達するであらう。そしてそれらを、永く人々に愛好される南海の古典として、台湾の文芸は、更に新しい次の段階に入つてゆくのである。

以上から、西川満は開花期の台湾文学を「天にそそり立つ巨峯たらし」めて「光栄ある結実期に」到達させることを目指していたことが解る。そのためには自らと交友のある文芸家だけではなく、先に列挙した自らとは相容れぬ文芸家たちをも含めた台湾文芸界の一元化を考えていたとしても不思議ではない。それが西川満の「台湾文芸界への展望」の主旨なのであった。つまりこの一文を発表した西川満の脳裏には後の「台湾文芸家協会」への構想がすでにあり、前述に挙げた台湾文芸界の作家たちへの讚美や、楊逵等自らとは相容れぬ作家たちへの言及は、台湾の文芸界を一元化するための前提であったと考えられる。そして、二月には西川満周辺の作家たちの間で「台湾文芸家協会」についての具体的な話し合いが行われるようになった<sup>(6)</sup>。

## 二.「台湾詩人協会」と機関誌『華麗島』

西川満が「台湾文芸界の展望」を発表した九ヶ月後、台湾の文芸界は大きな転機を迎える。それは、九月九日、台北市栄町通りにあった明治製菓売店の新設三階集会所において台湾在住の日台の詩人たちが会議を開催、「低迷せる台湾文化に活を与へ、この地に澆刺たる文学運動を展開すべく」<sup>(7)</sup>、「台湾詩人協会」結成式を行い、該会が発足したことである。当時台湾日日新報社芸芸部長であった西川満がその友人で詩人の北原政吉<sup>(8)</sup>及び台北在住で交友のあった黃得時、中山侑、楊雲萍、龍瑛宗等と相談し、彼等が世話人となってこの日の会議開催を決定した。会議は、九日午後八時から始まり、「文芸家協会」設置を前提として「会則」<sup>(9)</sup>「細則」「機関誌名」を決定し、また、機関誌『華麗島』を一月発行予定と決めた。そして、ここに日本人二名、台湾人一二名、総勢三三名の詩人を糾合した、従来の同人誌的性格とは異なる全島的詩人団体「台湾詩人協会」（以下「詩人協会」と略記）が発足したのである<sup>(10)</sup>。

西川満は、本来は詩人に限定せず、台湾の文芸家全体を糾合した団体、つまり「台湾文芸協会」を組織しようと考えていた。そこで、小説家たちにも呼びかけたのだが、「主義主張のちがう小説家がどうにもまとまらず〜（中略）〜一足先に詩人だけでも」と「詩人協会」を先ず発足させたという<sup>(11)</sup>。つまり、前節でも述べたように「詩人協会」を成立させた西川満の視野には、後に成立する「台湾文芸家協会」がすでに入っていたのである。故に会議では、上記のように「『文芸家協会』設置を前提として『会則』（「会規」）」等を決めたとされるが、それは西川満の発意だったと考えてよいだろう。「詩人協会」の「会規」は、注<sup>(9)</sup>を参照してもらえれば解るように「台湾文芸家協会」のために作られた「会規」であって、暫時「詩人協会」のために転用したにすぎない。

創立時の会員は『華麗島』創刊号末尾に附された「会員名簿」によれば、以下三三名であった。

\* 赤松孝彦（台北市）・\* 池田敏雄（台北市）・石田道雄（台北市）・系数正雄（台北州）・王育霖（台北市）・郭水潭（台南州）・\* 川平朝申（台北市）・喜多邦夫（台南市）・\* 北原政吉（台北市）・邱淳洸（台中州）・邱炳南（台北市）・\* 黃得時（台北市）・吳新栄（台南市）・澁山春樹（新竹州）・莊培初（台南州）・\* 高橋比呂美（台北市）・竹内康（実）治（台北市）・\* 中山侑（台北

市)・\*長崎浩(台北市)・長野泰一(台北州)・\*西川満(台北市)・新田淳(台北市)・新垣宏一(台南市)・日野原孝治(台北市)・久長興仁(台中市)・本田晴光(台中州)・萬波教(台北市)・水蔭萍(台南市)・村田義清(台北市)・楊雲萍(台北州)・\*龍瑛宗(台北市)・林精鏐(台南州)・林夢龍(嘉義市)

\*印は、事務遂行及び財政上の責務を果たすための委員で、すべて台北在住者であった<sup>12)</sup>。そして、委員のほとんどは当時の西川満と親交があり、黄得時を除けば西川満が編集していた『台湾日日新報』「文芸欄」の執筆者でもあった。黄得時については、西川自身その文芸家としての才能を認めており、自身の経営する雑誌『媽祖』(第二巻第三冊)にも寄稿を依頼しているし、また当時『台湾新民報』の「学芸欄」を担当していた関係で、彼を通じて他の台湾人作家の参加も期待したのかもしれない<sup>13)</sup>。

「詩人協会」は、新詩を中心とした機関誌『華麗島』の発行を先の結成式で決定し、一月の刊行を予定した。しかし、さらに「詩人協会」の会員拡大のために一般の詩愛好家の作品をも募集することになり、同年九月三日の『台湾日日新報』(以下『台日』と略記)に募集要領が掲載された<sup>14)</sup>。その反響は予想外に大きく、締切日二日までのわずか一週間で四七四篇の応募があった<sup>15)</sup>。応募の詩が多かったためにその選考に手間取り、一月発行予定であった『華麗島』が、印刷に附されたのは一二月を過ぎてからであり、その発行は二月一日となった(しかし、西川満の性癖から発行日のかなり前に雑誌はできあがっていたはずである)。そして、創刊号の印刷日である一月三日に「詩人協会」は、第二回原稿募集、つまり第二号掲載のための募集を再び『台日』紙上で行った。この第二回募集で編輯委員の一人であった長崎浩は、次のように語っている<sup>16)</sup>。

(詩人)協会成立に当つて、所在のあきらかな詩人には一応案内状を發しましたが、何分多数のこと洩れた分もあり、また案内したくても不明の方も多いので、便宜上かうした方法で自発的な参加申出でを求めてゐる次第であります。

以上の『台日』の記事とこの長崎の言葉から、『華麗島』は既に第二号発行の準備をしていたこと、原稿募集は一般の詩愛好家の応募を促す一方で、連絡のつかぬ台湾在住の詩人の自主的な会への参加を促すことにもあったことが解る。

二月一日、『華麗島』創刊号が発行された。本文五二頁。発行人は西川満、編輯人は北原政吉で、発行所は「台北市大正町一ノ二 台湾詩人協会」である。執筆者は総勢六三名、他に西川満の友人であった桑田喜好、立石鉄臣、宮田弥太郎の府展(台湾総督府美術展覧会)出品者が装画に協力した。「華麗島」とは、西川満が早稲田大学を卒業し帰台の折りに、恩師の吉江喬松(孤雁)から贈られた「南方は/光りの源/我々に秩序と/歡喜と/華麗とを/与へる」という詩句をもとに西川満が造語した台湾の美称であって、それを誌名でに使用したのである。また「詩人協会」の所在地「大正町一ノ二」とは、西川満の居宅であった。

創刊号の作家と作品は、以下の通りである。

火野葦平「華麗島を過ぎて」(隨筆) / 新田淳「霧」 / 楊雲萍「或る朝」「風」 / 高橋比呂美「青葡萄」 / 久長興仁「絶望」 / 郭水潭「世紀の歌」 / 竹内実治「兔」 / 王育霖「愛の巡礼」 / 龍瑛宗「花と痰壺」 / 長崎浩「朔北の風」「馬」 / 新垣宏一「廢港」 / 川平朝申「幼年思ひ出詩抄」(版画も) / 水蔭萍「月の死面 女碑銘第二章」 / 長野泰(長野泰一)「流水」「秋」 / 池田敏雄「單身娘」(隨筆) / 本田晴光「湖のほとり」 / 萬波おし

え(萬波教)「夜の中で」/「淡水聯章」/ 日野原千也(日野原孝治)「少女像」/ 喜多邦夫「元会境想譜」/ 澁山春樹「榕樹の影」/ 糸数正雄「望楼」/ 石田道雄「生誕記　をさなぶり」/ 庄訊濃「青鯤鮞幻想」/ 赤松孝彦「悲愴交響曲」/ 林夢龍「静かな夜」/ 青山英「手(遺稿)」/ 邱淳洸「七月の郷愁」/ 邱炳南「廢港」/ 黃得時「さりゆく人」/ 北原政吉「ながれ」/ 村田義清「侶律な詞」/ 中山侑「戦争構図」/ 戸田房子「遠い国」/ 大場新子「野草のうへで」/ 榎くに子「郷愁」/ 木村好美「秋」/ 柯劉氏蘭「相剋」/ 日奈都子「ある夜」/ 湊比佐子「田舎の子たち」/ 榎ツヨ「小鳩」/ 亀田恵美子「返信」/ 安田阿蘇子「秋と私」/ 司馬みえ子「草原で」/ 無記名「熱帯旗手」(編集記) / 中里如水「水牛」/ 潘永春「病める父」/ 児玉孝雄「ぼんじん」/ 楊萬壽「犬」/ 古波保夫「寂夜」/ 小島倭佐雄「幼い頃通つた道」/ 矢木淳「たはごと」/ 佐藤哲夫「無愁」/ 芥幸之助「建設」/ 佐藤哲次「春の風」/ 周林之助「捉はれの孤島」/ 並木宏「嗤ふ詩」/ 瀧坂陽之助(保坂瀧雄)「都会に近く」/ 城畑光彦「秋」/ 石井滋「サンパンを海に浮かべて」/ 島将五「海のはなれに　船出する M へ」/ 佐久間実「父へ」/ 宮本若志「水平線・点描」/ 馬場正敏「祭典(ツエテン)」/ 西川満「瘟王爺(をんおんいあ)」(小説) / きたはら生「燈虎」(編集後記)

上記で 印は会員、それ以外は選択された応募詩である。先に挙げた委員以外の会員中、楊雲萍、竹内実治、新垣宏一、水蔭萍、本田晴光(茂光)、萬波おしえ、喜多邦夫、石田道雄、邱炳南(永漢)、村田義清等も西川満とは比較的親しい関係であった。また、会員ではないがこの年に夭折した早稲田の同窓青山英は、西川満の最も好んだ詩人で『媽祖』の常連寄稿者であった。

### 三.「塩分地帯」の作家たち

さて、『華麗島』創刊号には三三名の会員がすべて作品を寄稿したわけではない。会員であった呉新栄、莊培初、林精鏐(芳年)の三人の作品は掲載されなかった。彼等はいずれも南部文芸の中心地である台南州北門郡佳里、所謂「塩分地帯」の作家たちである。呉新栄は、同郷の郭水潭の紹介で「詩人協会」会員となり、九月一六日に二首の詩「南国悲歌」「旧都回想」を「詩人協会」宛に送った。「呉新栄日記」の「昭和一四年九月一六日」には、次のようにある<sup>17)</sup>。

～郭水潭が台北にできた台湾詩人協会を紹介してくれたので、本日詩稿「南国悲歌」,「旧都回想」二首と入会費を送付した。この協会は楊雲萍と西川満が主宰するというので、ひとまず参加しておくことにした。～(原文:中国語)

この「日記」によれば、呉新栄は、九月一六日に入会費と共に詩二首を寄稿している。しかし、上記に見るように創刊号には掲載されていないし、また『華麗島』第二号が変じた『文芸台湾』創刊号にも、またそれ以後の号にもこの二首は掲載されなかった<sup>18)</sup>。他の会員たちが寄稿した詩はすべて掲載されているのに、なぜ呉新栄の詩が掲載されなかったのかは不明である。同郷の会員三人の内、林精鏐は、『華麗島』創刊号には寄稿しなかったようだが、第二号には寄稿し、『文芸台湾』には「朝の庭木」という詩が載っている。しかし、それ以後の『文芸台湾』には寄稿していない。莊培初は全く寄稿していない。また、郭水潭も上記のように『華麗島』創刊号には寄稿しているが、それ以後の『文芸台湾』には全く作品がない。

また、呉新栄は郭水潭から「楊雲萍と西川満が主宰する」と聞いたので「詩人協会」の会員と

なったようだ。郭水潭が何故「楊雲萍と西川満が主宰する」と呉新栄に伝えたのかは解らないが、おそらく「詩人協会」結成の世話人の半分が台湾人作家であり、その中で中心的な役割を楊雲萍に期待したからかも知れない。呉新栄にとっておそらく郭水潭の台湾人「楊雲萍」が主宰者の一人であるということが、詩を寄稿し入会する大きな動機になったと、推測される。呉新栄は、昭和九年（一九三四）五月六日、台中で台湾人作家主導の台湾文芸聯盟にいち早く参加、その後佳里に聯盟支部を設立し、次いで楊達創刊の『台湾新文学』の和文編輯を引き受け、張文環等が『文芸台湾』から離反し『台湾文学』を創刊してからは、それに全面的に協力した「塩分地帯」を代表する文芸家で、その生涯を「生為台湾人、死為台湾鬼（台湾人として生き、死んだ後も台湾人）」という信念で貫いた。そのような行動や今残されている文章から、呉新栄は、台湾文学は台湾人が中心となり主導的役割を果たすべきだと考えていたのは明確である。故に、前述したように『台湾新文学』停刊以後の台湾文学沈滞期に「楊雲萍」が主宰する「詩人協会」が台北に設立されると聞いて参加したのだ。ただし、それは日本人「西川満」も主宰者の一人であったために「ひとまず参加」と留保付きの参加であった。また、後に「詩人協会」が改組され、『華麗島』が『文芸台湾』となって以後に書かれた「日記」にも「～『文芸台湾』のような貴族的な編集には賛成はできないが、会員となれば優待があるので、ひとまずは購読しよう。（昭和一五年四月一八日）」とあり、呉新栄はおそらく『華麗島』発行以前に西川満の限定版装本の刊行やその浪漫主義的な詩風に「貴族」性を感じ取って嫌悪感を示したのであろう（昭和一六年八月一五日の「日記」にも大阪朝日の新聞記者藤野雄士と共に西川満の貴族的な存在について語った、とある）。戦後の事になるが、張文環が自ら発行した『台湾文学』を回想した一文中にも、西川満を評して「有閑マダムのままごとでもしているようで我慢が出来ない」（張文環「雑誌『台湾文学』の誕生」一九七九年八月三日『台湾近現代史研究』第二号）かったと述べているが、これも呉新栄と同様の観点であり、当時の台湾人作家一般の西川満観であったと言えよう。先に挙げた他の塩分地帯の詩人たちが『文芸台湾』に距離を置いたのも、この二人と同様の感じを西川満に懐いたからであろう。そして、西川満自身もおそらくそれを自覚していたのかも知れない。

#### 四．火野葦平と西川満

『華麗島』創刊号で最も注目されるのは、巻頭に掲げられた火野葦平（一九一七～六）の「華麗島を過ぎて」である。昭和一三年（一九三八）三月、出征中に「糞尿譚」（久留米『文学会議』第四号初出）で第六回芥川賞を戦地杭州で小林秀雄から受賞してジャーナリズムを賑わした火野葦平は、四月末に上海の中支派遣軍報道部に配属され、徐州作戦等に従軍する中で「麦と兵隊」を書き戦地から寄稿、『改造』八月号に掲載されて大反響を呼んだ。続いて「土と兵隊」を『文芸春秋』一二月号に、昭和一三年一二月一九日から「花と兵隊」を『朝日新聞』夕刊に連載して（昭和一四年六月二四日まで）、短期間のうちに一躍文壇、マスコミ、そして軍部からも注目される時代の寵児となった。火野は、徐州作戦以後の昭和一三年一月からは広東に駐留して南支派遣軍報道部に所属し、一年後の昭和一四年一月に現地除隊となったが、その間、昭和一四年九月一四日から一日間の日程で福岡において開催される「南支展」の指導のために南支派遣軍報道部の命令で内地に戻った。そして、再び南支派遣軍報道部への帰途の九月一七日に台湾日日新報社主催・台湾総督府後援の「時局・南支展」開催の打ち合わせのために初來台し、一週間程台北に滞在した。その折りに台北の宿舎で書いたのが「華麗島を過ぎて」の一文であった。その後一

月二日に「時局・南支展」が西門町の公会堂（現・中山堂）で始まるが、現地除隊し報道部囑託として内地に戻る途中の十一月二日再び台北の「時局・南支展」に参加した<sup>19</sup>。

西川満が火野葦平を知り、『華麗島』への寄稿を求めるきっかけを作ったのは、ロシア文学者で詩人の中山省三郎（一九一四～四七）であった。西川満は早稲田高等学院から早稲田大学に進んだが、中山も火野も同じコースを歩んでおり（但し、中山、火野は第一高等学院、西川は第二高等学院）、共に西川にとっては先輩であった。火野は大学を中退したが、早稲田大学在学中に中山や丹羽文雄等と『街』（大正一五年創刊）という同人雑誌を作り、また中山とは別に詩誌『聖杯』を創刊し、二人は終生変わらぬ無二の親友であった。火野の芥川賞後の最初の作品となる「麦と兵隊」の『改造』への掲載やその単行本化（昭和一三年九月改造社）は、すべて戦地にいた火野に代わって中山が奔走した。また、中山は火野が上海在駐時にも訪れているし、また昭和一三年の秋から年末にかけて改造社の依頼で広東に駐留していた火野を訪問し、その帰途に台湾に立ち寄りしばらく台北に滞在した。この時初めて西川満は中山省三郎と知り合った。共に早稲田の出身で浪漫主義的な傾向の詩人であり、互いに「装本」（西川満の造語で、紙の選定から印刷、綴じ、装画すべてに配慮して一書を仕上げること）にも強い興味をもっていたので、二人はたちまち意気投合した。その時に中山から火野の話題が出て、中山は火野の未発表小説「怪談宋公館」の出版を西川に依頼している<sup>20</sup>。しかし、その後の火野は海南島作戦や汕頭作戦等への従軍で忙しく、原稿は西川の元には届かず、結局は「怪談宋公館」は『南支日報』に連載され、代わりに西川は中山の詩を『羊城新鈔』（立石鉄臣装画）と題し、七五部の限定本として、自分の経営する日孝山房から昭和一五年七月一日に刊行した。このように中山省三郎と知己になった西川は、彼の紹介により早速自身で装本した『神曲余韻』、『傘仙人』、『のつて・うえねちあな』、『媽祖』等の限定本や雑誌を広東駐在の時代の寵児火野の元に送った<sup>21</sup>。火野が『華麗島』創刊号に寄せた「華麗島を過ぎて」は、以下のように西川満への称賛に満ちている。

戦場にある私のところへ、或る日、海をわたり山を越えて、突如として「傘仙人」が飛来して来た。私はこの華麗島からの客人に眼を瞠り、やがて私はその来訪に涙がさんさんと下つたのである。私はその慰問使に敬礼をし、その白髯の仙人の吟む歌声に、溢れ立つ華麗島の詩情を惻々と感じたのである。戦地にある傷だらけの私の机の上にやがて「神曲余韻」「のつて・うえねちあな」「媽祖」等の世にたぐひ稀なる美しき書物が積み上げられた。それらの書物はたとへやうもなく兵隊である私の心を柔らげ慰めてくれた。私は西川満といふ人に全く面識がなかつた。然し私はこの未見の友人の厚い志に対して深く銘謝し、同時に、詩人西川満氏のある台湾に澎湃と満ちてゐるであらうふくいくたる詩の波を想像したのである。私は寡聞にして台湾にどのやうな詩人が居られるのか知らない。今度来台して初めて西川満氏の風采に接し、台北帝大に居られる矢野峰人氏を初め、数々の詩人の名前を聞かされたのである。そして最近全島の詩人の合流団結の機運が熟して、詩人協会の結成を見るに到り、機関誌「華麗島」発刊の運びに到つたことを聞かされ、宜なるかなと思ひ、その詩運長久を祈つたのである。

火野葦平は、台湾でも有名であった。戦地杭州での芥川賞受賞、そして火野自身が戦場に身を置く兵士であり、その作品が戦闘中の兵士を生々しく描く記録文学であり、それは皇民化期にあった台湾の時局と合致し、当時の内地作家の中でも台湾での新聞報道が一番多かった。また、新聞

に掲載される「兵隊三部作」(「麦と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」)の数段貫きの出版広告も眼を引いたが、特に当時最大の庶民の娯楽であった映画は、その人気に拍車をかけた。昭和一四年一月二日に、台北の「ダイゲキ」を始めとする全島の映画館で小杉勇主演の大作「土と兵隊」(日活多摩・田坂具隆監督)が封切られたが、連日満員の盛況で一月一日のプレミアムショー以来一五日間の連続上映は、台湾映画界の新記録となったといわれる<sup>22</sup>。

このような内地文壇の寵児の一文が、僻地台湾の詩誌『華麗島』創刊号の巻頭を飾ったのである。故に台湾内でのその反響は大きかったと思われる。西川満によれば「この創刊号を見た小説家たちが仰天し、詩人がこんなに集まるのなら、自分たちも、と提携を申し込んできたからだ。わたしはいさぎよく台湾詩人協会を発展的に解消し、台湾文芸家協会を設立することに協力したのである」とあり、単に詩人の糾合のみに言及しているが、小説家たちも火野葦平のような大物作家が書くのならばと考え、「台湾文芸家協会」に参加を表明したのも多かったと推測できる。ここに西川満の最初の思惑通りに「台湾文芸家協会」が成立し、『華麗島』第二号は再編集されて「台湾文芸家協会」機関誌『文芸台湾』創刊号となったのである。

## 五．日本人作家の抬頭

昭和一四年一月五日の『台日』に「文芸家協会結成 台湾詩人協会を改組して」という記事が出た。『華麗島』の発行は、一月一日である。おそらく実際には奥付の発行日以前にすでに発行されていたと考えられるが、発行わずか五日後にして「詩人協会」を改組し「文芸家協会」にするということが決定されたのだ。一月五日の記事の全文は、以下の通りである。

台湾詩人協会は、かねて結成に先立ち、明春四月文芸家協会に改組することを声明してをみたが、この程創刊せる機関誌『華麗島』に対する内台の反響並に在台一般文芸家の要望に応へ、時局下大同団結文芸報国に邁進すべく四日夜委員会に於て、急速にこれが繰りげ実現を可決、会則も全般的に改訂、今後『台湾文芸家協会』として発足することになった、同夜北原委員は協会に於て次の如く語つた

最初から文芸家協会を前提として詩人協会を結成したのですが詩人が予想外に早く結束しましたので、この上は一般作家の加入を求め、主義主張生活態度の如何を問はず、『すめらみたみ』の名の下に在台文芸家が団結するを至当と思ひ、この際予定を早め文芸家協会に改組することにしました、今後官民各方面の御贊助を仰ぎ、微力ながら協会としては文芸報国の一念を果して行きたいと思ひます、またこれによつて時局下遠慮すべき同巧異曲の群小文芸誌の輩出を自粛し得ませう。云々

ちなみに『華麗島』第二号は既に編輯済みなので、各界協力による誌面の改革は第三号から実現する。

以上の記事から「詩人協会」は昭和一五年四月には「文芸家協会」に改組する予定であったことが、先ず解る。それは第一節で述べたように「台湾文学の展望」発表時に、西川満の脳裏には「台湾文芸家協会」という構図ができており、昭和一四年の二月にはすでに西川満周辺の文芸家の間では「懸案」の事項になっていた<sup>23</sup>。それを早めたのは「内台の反響」であった。

「内台の反響」とは、内地及び台湾在住の文芸家たちの反響である。「詩人協会」の設立の反響

については、九月二四日の『台日』に「台湾詩人協会の結成は、台湾との連絡上、この種文芸団体の設立を希望して来た、東京の文化諸団体並に各雑誌社側より異常な歓迎激励を受け」とある。ただし、東京のどのような諸団体及び雑誌社が反響を寄せたのかは、具体的には解らない。しかし、推測は可能である。昭和一五年三月一日、『華麗島』改組後の『文芸台湾』第二号に挿入された『台湾文芸協会 内報』に「賛助員名簿 - 内地の部」が掲載されており、七六名の内地文芸家と一新聞社の名が列挙されている。賛助員となった内地の文芸家たちは、安西冬衛、伊藤整、伊藤永之介、石坂洋次郎、岩佐東一郎、宇野浩二、小田嶽夫、川端康成、上司小剣、木下杢太郎、木々高太郎、木村毅、小宮隆豊、西條八十、田村泰次郎、高村光太郎、土岐善麿、丹羽文雄、長谷川伸、保田與重郎、保高德蔵、堀内大学、百田宗治、横光利一等々、内地の著名作家ばかりである。「詩人協会」設立時にもこれほどではなかったにせよ、このような作家たちあるいは彼等が所属する文芸団体から激励を受けたことは想像でき、「詩人協会」の会議でもおそらくこれらの内地文芸家の『華麗島』に対する期待が報告されたのであろう。それは前述したように火野葦平が『華麗島』創刊号に寄稿したのと同様のインパクトを台湾の作家たちにも与え、台湾の「小説家たちが仰天し、～提携を申込んできた」一因となったと考えられる。そして、これらの作家の大半は西川満と関わりのある人々だった。西川満は早稲田在学中の昭和七年に百田宗治主宰の『椎の木』の同人となり、しばしば詩を寄稿しており、百田宗治との関係は深かったし、また、自ら経営する媽祖書房から出版した限定雑誌『媽祖』や凝った装本の限定本は内地の著名作家たちに贈られ、西川満の名を知る内地作家も多かった。そのような関係で、『文芸汎論』社からは、「詩誌『媽祖』及び媽祖書房の詩集出版事業を表彰」して「文芸汎論詩業功労賞」が贈られ<sup>8)</sup>、それによって社主の岩佐東一郎や推薦者の堀内大学と親交を結ぶようになった。その上『台日』の学芸部長として多くの内地作家に原稿の依頼をし、長谷川伸や木々高太郎等とも親しくなった（これは西川満が戦後の日本で大衆作家として活躍する素地ともなる）。そしてこれらの作家たちの名前が、「詩人協会」の設立、そして「台湾文芸家協会」の設立にあたって大きな影響力になった。西川満は内地作家の名声を巧みに利用して、内地文壇に対して大きなコンプレックスを懐く台湾の作家たちの弱点を突くと共に、自らの交友の広さをも誇示しながら台湾の作家を一元化しようとしていたとも言えよう。

そして、更に台湾の作家たちの弱点を突いたのは、「時局下大同団結文学報国に邁進」という言葉に現れているように戦時下の挙国一致態勢であろう。第一節でも述べたように、日中戦争が拡大する中、上記に挙げた内地の作家（たとえば丹羽文雄や西條八十等）も従軍作家として戦地へ赴いた。台湾総督府の台湾人への「皇民化」が次第に強化される中で、日本人作家は当然、台湾人作家も内心はともかくも外面的には「文学報国」には協力せざるを得ない状況であり、それは台湾の作家を一つにまとめあげるには恰好の背景となり、力となった。北原政吉の「主義主張生活態度の如何を問はず『すめたみたみ』の名の下に在台文芸家が団結するを至当と思」うという言葉に、おそらく真っ向から反対する文芸家はいなかったはずである。そして、『華麗島』第二号は既に編輯済みにも関わらず、誌名を『文芸台湾』創刊号と変えて、「台湾文芸家協会」から発行されたのである。

「台湾文芸界への展望」において、「結実期」の台湾文学を展望した西川満は、以上のような様々な深謀遠慮によって「詩人協会」を「台湾文芸家協会」へと急速に収斂させていった。「詩人協会」の設立と『華麗島』の創刊は、詩人を一元化し、更に「文芸家協会」の下に日台の文芸家を一元化した様に見えたが、時局下の台湾文芸界においては、台湾人文芸家に替わり、西川満を筆頭と

する日本文芸家が台頭するきっかけとなり、そして、それはまた台湾人文芸家との対峙を生み出す序曲ともなった。

## 注

- (1) 漢文欄廃止の詳しい経緯については、中島利郎「日本統治期地湾研究の問題点」(二 四年三月一日、緑蔭書房『日本統治期台湾文学研究序説』) 収) 参照。
- (2) 従来、楊逵の『台湾新文学』の突然の廃刊については、たとえば葉石濤の『台湾文学史綱』に「一九三七年四月一日、台湾総督府は漢文の使用を禁止した。これは楊逵の主編する『台湾新文学』が廃刊となる主要な原因であった」という説が定説化していたが、実際には不十分な検証の下での定説化であると考えられる。詳しくは注(1)参照。
- (3) この年の『台湾新文学』には、翁鬧「夜明け前の恋物語」、頼明弘「結婚した男」、吳濁流「自然にかへれ」(以上一月号)、張文環「豚のお産」(三月号)、呂赫若「逃げ去る男」(五月号)等の小説が載り、また、阿Q之弟(徐坤泉)の二冊の小説『暗礁』(四月)、『靈肉之道』(共に中国語)が台湾新民報社から出版されている。更に龍瑛宗の「パパイヤのある街」が、日本の雑誌『改造』の懸賞募集に入選する等、この年の前半は後半に比較してまだ活気があった。
- (4) 張良澤主編『吳新栄日記・戦前(吳新栄全集巻六)』(一九八一年一月遠景出版事業公司)「昭和一六年八月一五日」。
- (5) 鬼谷子「文芸時評・リアリズムの問題」(昭和一四年六月二二日『台湾時報』第二三五号)。「鬼谷子」は西川満の筆名。西川満は、昭和一四年二月七日の『台湾日日新報』から同年四月一日まで「列仙伝」を二四回に渡って連載した。その中の第一五・六回(三月一四・一六日)が「鬼谷子」で、これを筆名とした。尚、昭和一四年五月二日『台湾時報』第二三四号にも鬼谷子「文芸時評・気魄の貧困」がある。
- (6) 昭和一四年一月二日『台湾日日新報』の記事「『文芸台湾』創刊 台湾文芸協会の手で」の中に「今春二月来の懸案であつた台湾文芸協会は、既報の如く台湾詩人協会の改組合流により〜」(傍点著者)とある。
- (7) 「昨夜結成された台湾詩人協会」(昭和一四年九月一日『台湾日日新報』)
- (8) 北原政吉：明治四一年(一九〇八年)、岐阜県の生まれで大正年間に渡台。その作品は主に『台湾日日新報』や『文芸台湾』に発表され、西川満とは親交があった。台北師範学校卒業後、小学校教員をしながら、詩作に励み、昭和一一年(一九三六年)九月一日に詩集『影』を自費出版した。西川満の依頼で、『台湾日日新報』にかなりの数の小説や詩を掲載している。戦後は台湾の詩人の会『笠』の同人となり、中でも陳千武と親しい。一九七九年(昭和五四年)二月二八日、九州のもぐら書房から『台湾現代詩集』を編集刊行し戦後に活躍した台湾人詩人を日本に紹介した。また、後に陳千武と共に『続・台湾現代詩集』(八九年五月三一日もぐら書房)を編集刊行している。現在千葉県在住。尚、六人の世話人については、昭和一四年八月五日『台湾日日新報』掲載「近く結成される台湾詩人協会」に拠る。
- (9) 新聞には「会則」とあるが、実際は「会規」となっている。『華麗島』創刊号末尾に掲載された「会規」は、以下の通りである。

### 会 規

- 一、本協会は台湾詩人協会と称す
- 二、本協会は台湾に於ける詩文学の向上発展並に会員相互の親睦を図るを以て目的とす
- 三、前条の目的を達成せむがために左の事業を行ふ
  - A 詩文学に関する各種の研究並に会合等
  - B 詩文学に関する雑誌並に図書出版
  - C その他目的の範囲内に於ける必要な事項
- 四、本協会は台湾在住並に台湾出身の詩人及び文芸家にして本協会の趣旨に賛成せるものを以て会員とす
- 五、本協会に入会せむとする者は会員二名以上の推薦を要す
- 六、会員は一定の会費を納入する義務を有す

七、会員にして退会せむと欲する場合は書面を以て届出づること

八、会員の義務を半年以上履行せざる場合は自然退会したるものと見做す、会員たる体面を汚辱したる者は除名す

九、退会又は除名にする場合と雖も、納付金は返還せず

十、その他の項目は細則に於て定む

尚、『文芸台湾』創刊号の附録「台湾文芸家協会 会報一」の中に同会の「会規」があるが、その「会規」は、上記と条項のみならず字句までほぼ同一であり、「台湾詩人協会」を「台湾文芸家協会」に、「詩文学」を「文学」に、「台湾在住の並に台湾出身の詩人及び文芸家」を「文芸家」に訂正すれば、そのまま「台湾文芸家協会」の「会規」となる。

(10) 注(7)に同じ。

(11) 西川満『『華麗島』のころ(年譜9)』(一九九一年六月六日人間の星社、西川満『わが越えし幾山河』)

(12) 注(9)の「会規」の後に附された「備考」に、次のようにある。

一、事務遂行のため会員中より台北在住の若干の委員を選出す。

委員は財政上の責務を有す現在の委員は左の如し(五十音順)

文化部	黄得時	中山 侑	龍瑛宗
編輯部	北原政吉	長崎 浩	西川 満
会計部	池田敏雄	川平朝申	
事業部	赤松孝彦	高橋比呂美	

一、会員の会費は当分左の如し

A 準会員 二箇月一円(入会金不要)

B 会 員 二箇月二円(入会金一円)

C 委 員 別に定むる規定による

(13) 前節で言及した「台湾文芸界の展望」に「～黄得時氏は、現在『台湾新民報』学芸欄の編輯者であるが、粗雑な文章を書く人の多いこの島にあつて、珍らしく繊細な感情、詩人的天賦にめぐまれた士であり、その作品、また愛誦すべきものが多い」とある。

(14) 「詩人協会が詩作品を募集」(昭和一四年九月一三日『台湾日日新報』)には、募集要項が次のように掲げられている。「一、詩二篇以上、住所姓名明記ノ一、第一回締切九月二十日(採否一任のこと)ノ一、台北市大正町一ノ二台湾詩人協会宛ノ作品は当番編輯委員の手で創刊号誌上に発表且つその作家は会員に推薦すると」

(15) 「台湾詩人協会文化運動に着手」(昭和一四年九月二四日『台湾日日新報』)

(16) 「詩人協会が第二回原稿募集」(昭和一四年一一月三日『台湾日日新報』)

(17) 注(4)に同じ。

(18) 一九九七年三月一五日に台南県立文化中心から刊行された『吳新栄選集・一』中の「震瀛詩集」に「旧都回想」及び「南郊(国)悲歌」が漢訳と共に収められており、「以上の二首は共に一九三九年の作で、吳氏がこの詩を台湾詩人協会に送ったが発表されなかった」との編者注がある。以下に、『吳新栄選集・一』に収録されている上記二首を再録しておく(誤字・誤記は訂正した)。

#### 旧都回想

古城のそれにも似たるあの学び室に  
老子や孫文を語つたのは  
も早や二昔を過ぎ去つた  
熟蕃の未裔とは云ひながら  
月下に凜々しく語る君は  
未来に憧れを持ちし宛ら予言者の如く  
されど君の名も君の姿も  
あの月影と共に去りしこと久しく  
今吾等の聖域アジアは  
新生の光に輝きつゝあるのに

#### 南郊悲歌

涼風そよ吹く南郊の砂丘よ  
夕霞棚引く鯉鱒の七島よ  
私は今亡妹の塋を訪ねつゝ  
再び感慨深くこゝに佇む  
  
その昔大志を懐きて  
東漸せし遺民の群よ  
汝等の野望は只白骨と変りて  
この砂丘を築けたのみ

そしてその向ふの旧き世界は  
 又自滅の業火に燃えつゝあるのに  
 さはれ旧都の思ひ出は  
 只若き日のはかなき夢のみであつた  
 曾て敬ひし師は  
 已に久しく南郊に隠棲して  
 遂に再び世を語らなかつた  
 偉大なるカーライルの史学を  
 朗らかに談ずるあの慷慨な姿も  
 高潔なるトルストイの愛書も  
 諄々と説くあの敬虔な面影も  
 あゝ秋風と共に去つただろうか  
 旧都の秋の思ひ出は  
 かくも懐しく寂しく心にまつはる

おゝ瘴煙と戦ひて過ぎし  
 三百年の悲しき青史よ  
 已に肉親をこゝに葬り去り吾等は  
 亦何時の日かこの一塊の土とならう

- (19) 「火野葦平軍曹広東に左様なら 熱病も恢復して内地へ」(昭和一四年一月二日『台湾日日新報』)及び「火野氏も絶賛の辞 時局・南支展の会場を觀覽」(同前一月三日)
- (20) 西川満「羊城新鈔 わたしの造った限定本<sup>(18)</sup>」(昭和五年一月二三日『アンドロメダ』74)
- (21) 『神曲余韻』は、平田禎木著の散文集、宮田弥太郎口絵、昭和一二年二月二八日媽祖書房(西川満経営)、百部限定。『傘仙人』は、西川満著の童話、昭和一三年八月八日日孝山房、朱傘本二二部、黄傘本二百部限定。『のつて・うゑねちあな』は、イタリアのアランデル・デル・レー原作、島田謹二訳、宮田弥太郎装画、昭和一四年九月一日日孝山房、七五部限定。原作者は当時台北にあったスタンダード石油の洋館に住んでいたイタリアの名誉領事。『媽祖』は、西川満が昭和九年一月一日に創刊し、媽祖書房から発行した台湾民俗色の濃厚な文芸誌で、昭和一三年三月三日発行の第一六冊で廃刊、各々限定三百部。
- (22) 「『土と兵隊』続映 十五日までダイゲキ」(昭和一四年一月九日『台湾日日新報』)
- (23) 注(6)と同じ。
- (24) 『文芸汎論』昭和一三年五月号に「文芸汎論詩集賞」第四回の選考結果が載っており、本賞は菱山修三の『荒地』であったが、審査委員の一人佐藤春夫の提案で、「詩業功労賞」を西川満に贈呈するとある。

本稿は、平成一五年度岐阜聖徳学園大学学術研究助成金の成果の一部である。